

各種砂・鉢の乾き具合について

初めに

20年余り前に西澤信代司氏により、鉢土の乾き方の実験がされ、「サボテン信州」に発表されている[11]。材料や粒の大きさを変えて、大きさや材料の異なる鉢に入れ水をやって、含水量の減り具合を詳しく調べた。方法は最大保水量の所で述べたが、台所用のような秤さえあれば簡単に出来るのでぜひ試して頂きたい。ここでは表を図にし、本文は要約して紹介する。

(1) 材料の種類による変化(粒の大きさは1-3mm、鉢は4号朱泥鉢、300cc 灌水)を図1に示す。どの場合でも初めは急速に水が減り、次第に減り方が鈍くなって、最後に完全に乾く。種類については、現在の代表的な材料である赤玉は、えぞ砂、鹿沼土と同じ傾向で初期の含水量が最大である。また軽石は、浅間砂や日向土と同様であり、初期含水量は赤玉より少ないが後に逆転する。砂は保水量が少なくとても乾きが早く、富士砂もどちらかと言えば砂に近い。パーミキュライトは非常に含水量が多く乾きも遅い。

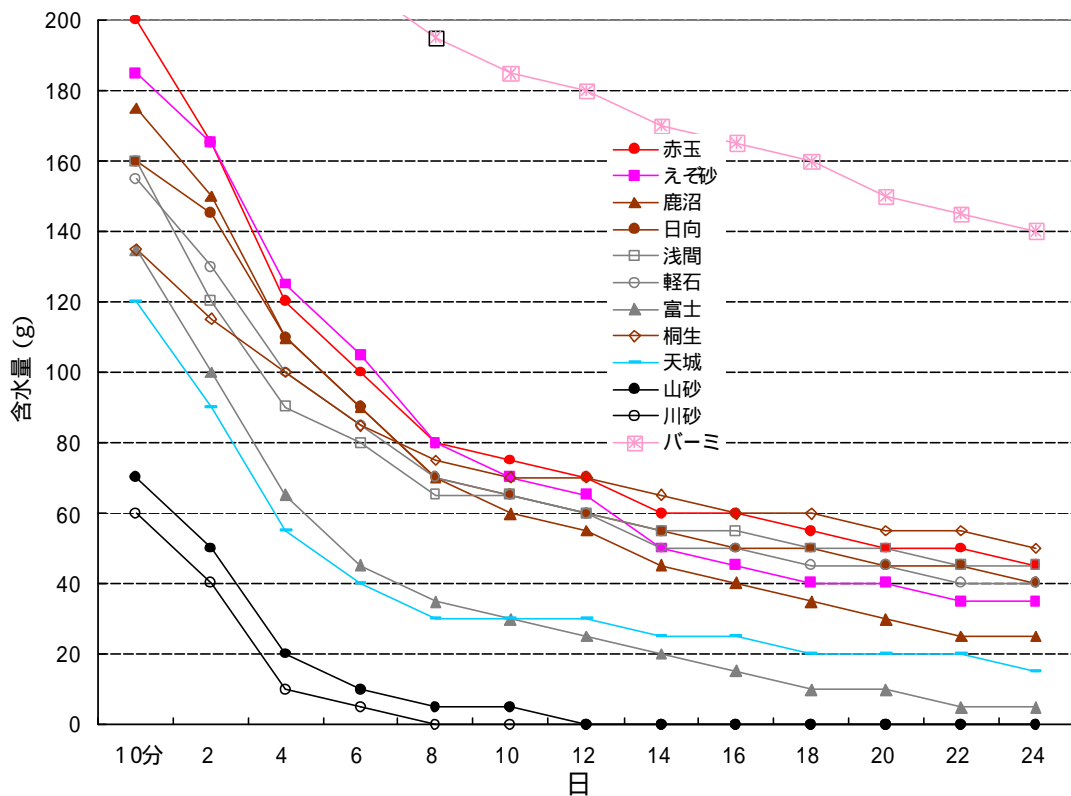


図1 材料による乾き方の違い

(2) 粒の大きさの影響を図2に示す。上(黒印)が富士砂、下(白印)が山砂であるが、粒の大きさで見ると、0.5-1mmでは最初の保水量が多く遅くまで含水量が多いが、一方4-5mmでは山砂では約1週間で完全に乾いてしまう。同じ大きさの物が似た含水量を示しており、種類よりも大きさの方が重要なことが分かる。

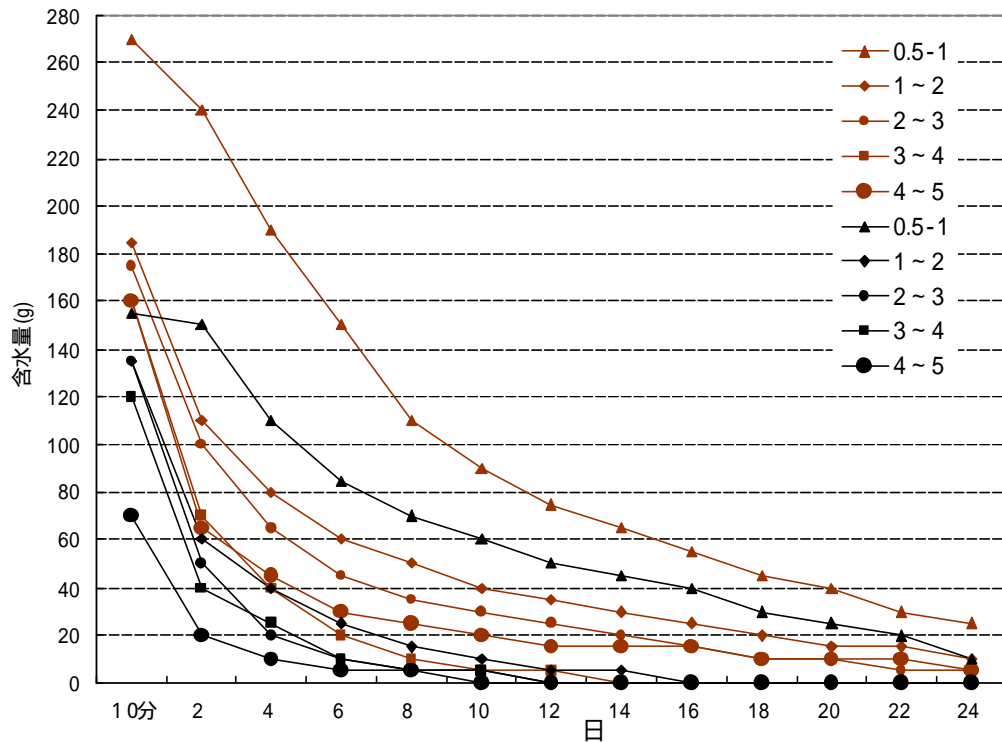


図2 粒の大きさによる乾き方の違い

(3) 鉢の種類による乾き方の違い

図3は鉢の種類を変えて乾き方を調べた例である。同じ材料を同じ体積だけ入れているが、鉢の吸水と構造の為に初期含水量も異なっている。大ざっぱに言うと、現在主流のプラスチック鉢（白、黒）や以前に普通に使われていた朱泥・駄温・上薬鉢は同等で最も早く、一部の趣味家が観賞用に用いる楽焼きやう泥がほぼ同じで次ぐ。素焼きはとても乾きが早い。腰高鉢と平鉢は容積が同じなら差は無く、つば付きも余り変わらなかった。材料を選択する際にはこのように鉢の種類をも考慮する必要がある。

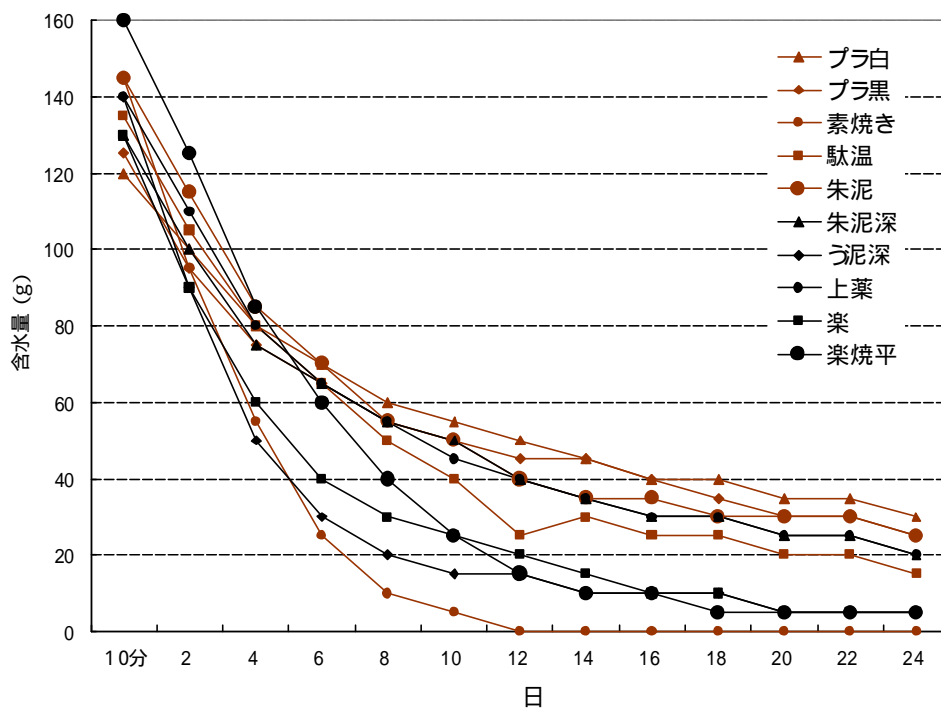


図3 鉢の種類による乾き方の違い

(4) 鉢の大きさ

鉢の大きさや種類が変わると、培養土の乾き方はとても異なってくるので、鉢に合わせて培養土も変える必要がある。図4は砂で調べた結果で、2.5号鉢では6日で完全に乾いてしまったが、4.5号鉢では20日近く経っても含水量は初めの1/3位ありその後の減り方も非常に遅い。次の水やりの時期は曲線の曲がり目立つ辺りで、3.5から4.5号鉢に対して12-16日である。

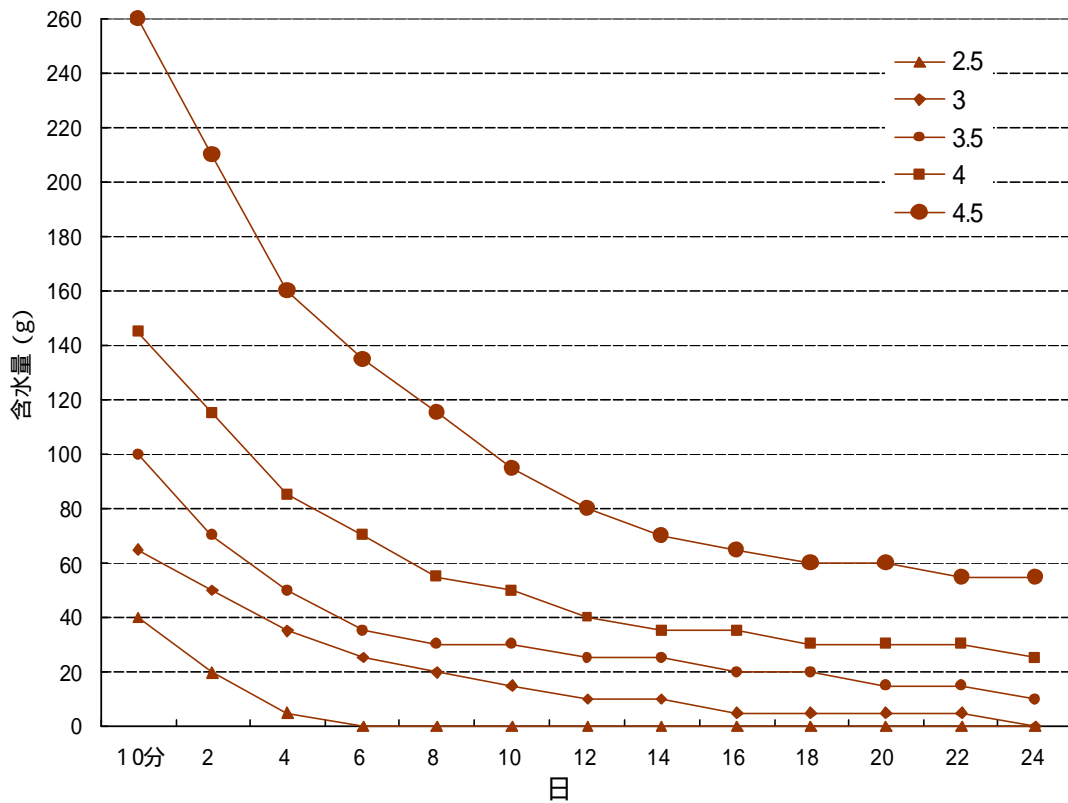


図4 鉢の大きさによる乾き方の違い